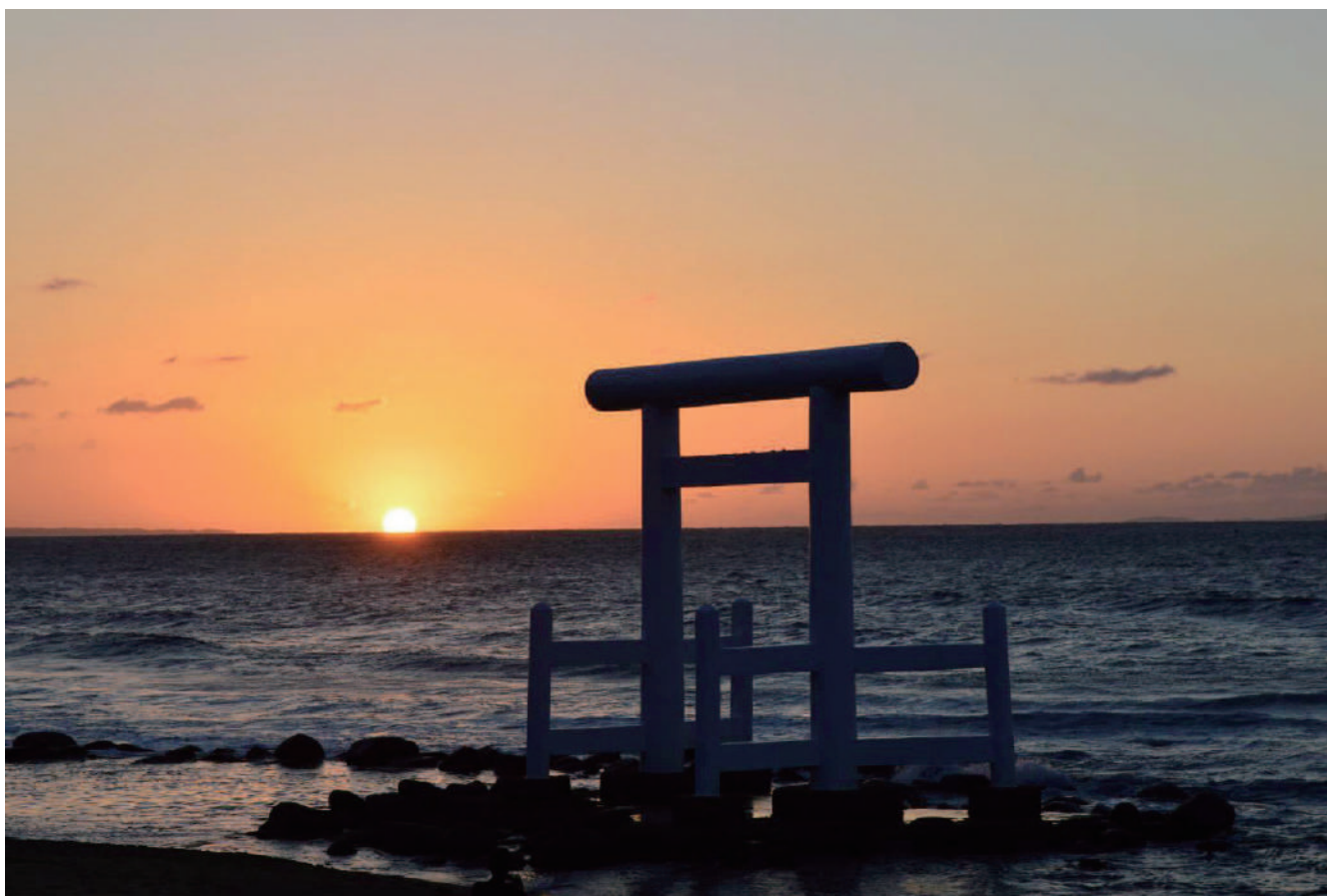




うれしの

2019.1
第58号

【発行所】
嬉野医療センター
佐賀県嬉野市嬉野町
大字下宿丙2436番地



「鳥居と日の出（糸島市志摩桜井二見ヶ浦）」

基本理念

「ひとり一人を大切に」

医療は患者さんの為のものであり、安心して安全な医療の実践が必要である。ひとり一人を大切にすることは、この医療の実践に重要である。この「ひとり一人」は、患者さんのみならず当院に関係する全ての人たちを指し、ひとり一人が大切にされることによって、ひとり一人が周囲を大切にする。このようにして、当院は人命を尊び人格を敬って医療に携わっていくものである。

運営方針

- | | |
|---|---|
| 1 迅速で質の高い医療
2 安全で安心な医療
3 地域医療構想に基づく医療
4 患者さんの権利を重視した医療 | 5 適切な病院機能の更なる継続
6 経営基盤の確保と新病院建設
7 将来を担う医療人の育成
8 臨床研究と治験による医療への貢献 |
|---|---|

患者さんの権利

- | | |
|---|--|
| 1 安全で、かつ平等な最善の医療を受ける権利
2 疾患の治療等に必要の情報を得、また教育を受ける権利
3 治療法を自由に選択し、決定する権利
4 プライバシーが守られる権利 | 5 常に人としての尊厳を守られる権利
6 医療上の苦情を申し立てる権利
7 継続して一貫した医療を受ける権利
8 生活の質(QOL)や生活背景に配慮された医療を受ける権利 |
|---|--|



年頭所感

嬉野医療センター院長 河部庸次郎



嬉野医療センターの院長を拝命して6年目となりましたが、今年度もあと3ヶ月になりました。私の院長としての仕事の1つである新病院建設、今まさに竣工日が近づいています。できあがりには驚くほど和やかで、また美しくなりそうです。プロポーザル方式で佐藤総合計画に設計を依頼することになりましたが、当初は新病院の設計計画に様々な議論、反発もありました。佐藤総合のアイデアで、土地の高低差を考慮して新幹線駅側を1階として、2階全体で外来患者へ対応できる設計計画が届けられました。1階のエントランス付近はゆとりを持った構造で、椅子やテーブル等でゆったりとしたスペースを確保し、2階への吹き抜けがあります。2階はワンフロアで外来診療がほぼ完結できるようになっています。病棟はなるべくナースステーションから病室への距離を短くし、各部屋に広い窓を確保し光と明るさのあるスペースを造っています。救急外来は直接画像検査が行える様にCT室を隣接させ、救急用エレベーターで手術室、救命救急室、ICUにダイレクトに運べる構造となっています。ヘリポートは屋上に用意し、救急用エレベーターから院内の救急対応部署に直行可能な構造です。新病院はこの様にして各階の平面を救急エレベーターが縦に貫く軸となった立体空間を形成しています。しかしながら、当初建設委員会では委員達からたくさんの意見が出ました。形が不規則で無駄な部分が多い、もっとシンプルなものではないか、外来患者さんを1階から2階へ上がらせるのは絶対反対、などなど。

私は一度この中（いくつかの設計案）のどれにするかは将来を担う職員の皆さんによる選挙で決めてもいい、とつぶやいた事もありました。中でも、外来患者さんが1階から2階に上がらなくて済むにはどうしたらいいのかをずっと考えていました。当初の設計では新病院はより国道側に近い位置へ建てられる予定でした。したがって、外来駐車場は反対の新幹線駅側になります。外来患者さんは新幹線駅側の外来駐車場から1階に入って2階の外来診療フロアへ上がり、外来診察を受けることになります。外来患者さんが1階から2階に上がらずに済むにはどうすればいいかと考えていた時に、外来駐車場を国道側にして外来駐車場から直接2階外来フロアへの玄関口をつくれればいいのではないか、と思いました。これなら外来患者さんは階段の昇り降りなしに診療が受けられる。この案を建設委員会で提示し、受け入れられ、現在建設中の新病院の構想になったのです。これは、他にも良い点があって、従来の案では病院の玄関口は新幹線駅側のみとなっており、国道側が裏口の様な印象がありました。しかし、現新病院は国道側と新幹線側の両側に玄関口ができました。従来の案では地元の患者さんが多い側（国道側からのアプローチの人が多く）に背を向ける格好にはなっていませんでした。この案は、当院が決して新幹線駅側（他の地域からの人々）の方を向いているのではなく、地域の患者さん側を向いていることを示しています。

残念ながら、当院の財政事情もあり、多くの部分で我慢しないといけない所もたくさんありました。しかし今、完成近くの新しく美しい病院が私に力を与えてくれているように、職員全員にも大きな力を与えることができていると思っています。そして、佐賀県西南地区、長崎県東彼地区にお住まいの皆様にも希望を与えてくれるのではないかと期待しています。国立病院機構嬉野医療センターは、今後も継続して皆様に良い医療を提供しようと努力していきます。皆さんと一緒に考え、一緒に悩んで、少しでも皆さんに喜びや安らぎを与えられるように、皆さんと共に、新しい病院と共に進んでいきたいと思っています。

嬉野医療センターのスペシャリスト

認知症看護認定看護師としての認知症看護ケアの実践

認知症看護認定看護師 池田貴子

私は、平成30年6月に認知症看護認定看護師の試験に合格し、現在認知症看護ケアサポートチーム（DST）の一員として活動しています。急性期病院では、認知症者の意思や尊厳が守られることよりも高度専門治療や術後の管理が優先され、生命の維持や安全を保障することに重きをおくため、やむを得ず抑制されている現状にあります。私自身、手術や治療を安全に進めるために抑制することにジレンマを感じ、他に方法はないか、この現状を何とかしたいと思い認定看護師の資格を取得しました。



認知症看護に大切なことは、認知症者が記憶の障害により伝えたいことを伝えられずに、不安や苦痛をもっている一人の人であるということをお忘れずに関わることだと思います。また、認知症看護とは、その人の尊厳が守られその人に一番適切な看護とは何かを認知症者の思いに寄り添い、その人を取り巻くすべての人と一緒に見出していくことだと考えます。

DST活動では、病棟での対応困難な事例について依頼を受け、病棟スタッフと一緒に検討しています。患者さんが穏やかに過ごすために、患者さんが今置かれている状況の一つ一つ紐解きながら考えています。身体疾患、認知機能の程度や認知症症状の内容、これまでの生活歴や日常生活行動での困難さ、性格、趣味など、安心できる療養環境づくりに生かせる情報を追加しながら検討します。認知症の種類や脳の萎縮の程度、部位などを医師に確認し、根拠に基づいたケアとなるようアドバイスしています。また、家族や本人の思いを聞くことを大切にしたり関わり、MSWや診療心理士と一緒に入院前の生活状況の確認や退院後の生活を見据えた支援の方法を検討しています。私は、認知症看護を実践するには、日常のケアを一つ一つ丁寧に行うことが大切だと感じています。認知症患者さんとゆっくり時間をかけて関わることは難しい環境かもしれません。しかし、関わり方や声のかけ方、環境調整など、できることはあると思います。私たち看護師が笑顔で明るく楽しんで看護をすることが認知症患者さんの安心につながります。みなさんと一緒に笑顔のみえる認知症看護を実践していきたいと思っています。



「地域と築く1つの輪」地域と交流をめざした病院祭・嬉看祭



平成30年10月20日（土）に嬉野・病院ふれあい祭および嬉看祭を開催しました。第49回を迎えた看護学校が主催する歴史ある嬉看祭に加え、「地域で愛される病院でありたい。患者さん、ご家族、職員と一緒に楽しめる病院祭を開催しよう」との提案から開幕した病院祭のイベントも、第2回を迎えることができました。テーマは「地域と築く1つの輪」。このテーマを達成すべく、今年度も体験コーナーや相談コーナー、ミニ縁日、市民公開講座等々、地域の方々とのふれあいが盛り沢山のイベントとなりました。



本当は怖くない!? ー手術室体験ー

10月20日に第二回嬉野・病院ふれあい祭が開催され、手術室部門として臨床工学技士2名、手術室看護師2名の計4名で参加させていただきました。

手術室と聞いてどのようなイメージをもちますか？一般病棟と異なり、「特殊」で多くの方は不安や怖いところというイメージをもたれるかと思います。そのようなイメージを少しでも払拭してもらおうと、手術室部門では3つの体験ブースを設けました。1つ目は鶏肉を電気メスで切開し、持針器と針を用いて縫合作業までを行う体験ブース。2つ目は内視鏡を用いて実際の手術のようにモニターを見ながら鉗子操作し、設置したフックに輪っかを通しを行う体験ブース。3つ目は隣接する看護学校から数名の看護学生の協力により、手術ガウンを着る体験ブースを急遽設置することができました。

当日は約90名の子どもから大人まで幅広い年齢層の方々に体験していただきました。ほとんどの方が初めて手術機器に触れるということで、最初は恐る恐る触られていましたが、スタッフによる機器の説明や操作方法を見ていくうちに、好奇心を刺激され夢中で機器体験をされる方がたくさんいました。また何度も内視鏡体験に来てくれる子どもやスタッフの誰よりも器用に機器を操作する子どももあり、未来の「スーパードクター」を見ることができたと思います。大人の方々からは、手術室はどのような雰囲気や機器はどのように使用するのかといった質問もあり、たくさんお話をさせていただいたことで手術室がどのような場所なのかより明確にイメージしていただけたのではないかと思います。



ないかと思います。

今回嬉野・病院ふれあい祭に参加できたことに感謝し、まもなく完成予定の新病院でも毎年開催、参加できることを楽しみに日々の業務に努めていきたいと思っています。

（文責：臨床工学技士 小林将己）



成功のソースの香り — 飲食コーナー —

企画課では飲食コーナーを担当することになり、焼きソバ、豚汁、おにぎり、飲み物を用意しました。どれくらい地域の方が参加されるのか、子供たちはたくさん来てくれるのかどうか、不安と期待がありました。当日は天気にも恵まれたおかげか、想像していた以上の来場者で、200名を超える受付人数だったそうです。焼きソバや豚汁は大好評で、3時間程度で売り切れになってしまいました。その中でも焼きソバは、注文が殺到して終始お客さんが絶えず、非常に盛り上がりました。たくさんの方々に楽しんでもらえたようで、あっという間に終わったお祭でした。現病院では最後となりましたが、地域の方・病院職員ともに良い思い出になったのではないかと思います。来年は今年度の反省を活かし、新病院を大いに盛り上げるイベントとなるような病院祭を目指したいと思います。

(文責：契約係 米森智紀)

病院祭を通しての楽しさ — お薬相談・調剤体験 —

薬剤部では2年間続けて「お薬相談所」と「調剤体験」の2つを催しました。

お薬相談では、普段から病院にかかり処方薬を飲んでいるような患者さんや、OTC（一般用医薬品、市販薬）を大量に使用されている患者さんなどから、日ごろの疑問や不安、また薬効についてなど幅広い話題について相談がありました。

調剤体験では、子供に標準を合わせてオリジナルの「しょほうせん（処方箋）」を元に、薬に見立てたお菓子を集めて（調剤して）もらいました。

昨年度もたくさんの子供及び保護者の方々に調剤体験に来ていただきました。調剤体験自体、初めての取り組みだった事もあり、薬包紙の折りたたみ方が子供の年齢に対して難しく時間がかかり過ぎてしまったり、物品の不足がでるなど様々な問題と直面しました。

また一概に子供といっても、個性や年齢の違いによる理解度や器用さ、興味の示し方がまるで異なるため、一人ひとりに合わせた言葉遣いや対応に大変難儀したことを覚えています。

今年はこれらの反省点をスタッフ全員と共有し、調剤内容の易化や物品の取り揃えを行うことで、幼稚園に上がる前の小さな子供から小学校高学年にわたる幅広い年齢の子供たち皆に最後まで楽しんでもらうことができたのではないかと考えます。

今年は嬉看祭との合同開催ということもあり、嬉野看護学校の生徒達自身の活躍と協力があつたことはもちろん

のこと、ある時は参加者の一人として場を盛り上げるなど大変な力添えをいただきました。

普段直接的には関わりの少ない地域に住む方々や看護学校の生徒及びスタッフと同じ時間を共有することで、互いの距離感を縮めることができたのではないかと思います。

来年度は病院も新たになり、より一層の賑わいを期待していただけるようスタッフとして関わって行きたいと思っています。

(文責：薬剤部 中村伸彰)

No.	処方名	用法	回数
1	チョコレート	1個	2日分
2	やみりボーロ	スプーン	1日1回 1杯 1日分



安全で安心できる看護を目指して

副看護師長研究会 PNSグループ 5病棟 阿部容子

PNS という言葉をご存知でしょうか。PNS とは、Partnership Nursing System（パートナーシップナーシングシステム）の略で、働き方改革として日本の看護現場で生まれた看護提供方式です。

これまで日々の検温等で、1人の看護師が複数の患者さんを担当することが多かったと思います。PNS は、より安全で質の高い看護を提供することを目的に2名の看護師がパートナーとなり、2人一組で毎日の看護を提供させていただくというシステムです。パートナー同士が対等な立場で互いの特性を活かすことで新しい考えやアイデアが生まれるという、看護における「シナジー（相乗）効果」を期待されています。1 + 1 = 2ではなく、それ以上の効果を発揮するということです。

当院では初めてのPNS導入であり、副看護師長研究会のグループメンバーが中心となりこの取り組みを準備・推進しています。私たちは不安を抱えながら、事前準備として長崎大学病院への見学実習に参加しました。そこでは、経験年数の異なるパートナー同士が互いに相談し合い、助け合う（補完する）ことで安心感があるだけでなく、自分では気が付かない発見があるとともに、患者さんにとっても安全で安心できる対応に繋がることを学んできました。

その後検討を繰り返し、平成30年11月より5つの病棟でPNSを開始しました。今までの看護体制との違いに戸惑うこともありますが、スタッフからは「先輩とパートナーを組むことで知識や技術を教えてもらう機会になった」、「コミュニケーションを取ることが増えた」などの意見が聞かれ、前向きに取り組んでいると感じています。PNSを成功させるためには「パートナーシップマインド」が不可欠と言われています。それは、お互いの信頼関係を築くための心の持ち方です。マインドには①自立・自助の心 ②与える心 ③複眼の心、の3つの心があります。それらの心の持ち方を私たち自身が育み、共有していくことがこれからの課題と考えます。誰かに助けてもらった時には、「すみません」ではなく、「ありがとう」と言える風土づくりを目指しています。

PNSはスタートしたばかりですが、明確になってきている課題を共有・改善しながら進めていくとともに、私たち自身がより楽しく看護を実践できるようにリーダーシップを図っていきたいと考えます。



第6回 国立病院機構 福岡・佐賀地域医療連携室交流会

地域医療連携室だより

医療社会事業専門員 井上朋也

本年度は平成30年11月17日(土)に九州医療センターにおいて『地域医療連携室の苦労を分かち合おう!』をテーマに、前半は『診療報酬、介護報酬同時改訂にともなって連携室が取り組んでいること』で各施設の取り組み発表、後半は『退院支援・地域連携の対応困難事例から学ぶ』という内容でグループワークを行いました。参加者は37名(看護師22名、ソーシャルワーカー15名)。

・取り組み発表『診療報酬、介護報酬同時改訂にともなって連携室が取り組んでいること』

大牟田病院、九州医療センター、九州がんセンター、小倉医療センター、福岡東医療センター、福岡病院、嬉野医療センター(発表順)の7医療機関より取り組み発表があり、どの施設も入院時からの支援強化に取り組まれている事が感じられました。当院の発表には新病院の告知も含ませることで、病院移転を周知する機会となりました。

・グループワーク『退院支援・地域連携の対応困難事例から学ぶ』

看護師・ソーシャルワーカー混合の編成でのグループワークでは、参加者が持ち寄った困難事例に対して、難しさを共感したり、新たな視点を提案したりという内容が主であったと振り返ります。また、「みんな悩みながら、患者さん・家族のことを考えながら仕事をしているんだな」ということが、メンバー同士で共有できた良いグループワークでした。

患者さんの生活に寄り添った支援の重要性を改めて感じるとともに、解決の為にヒントを得ることが出来たと思います。



他医療機関のスタッフとのグループワークを通して、対応困難事例や管理的な課題について共有することで、自分の所属部署が感じている悩みや課題は、他医療機関でも感じられている事柄であることに気づき、加えて語るという行動を通してカタルシス効果も生まれ、国立病院機構病院同士の横のつながりのありがたみを感じる機会となりました。

また、地域医療連携という同一部門での情報交換が可能な交流会を今後も継続的にを行い、参加医療機関相互の情報交換を通して、経営改善の一翼を担っていきたいと思った次第です。

地域医療連携室 新任 MSW の紹介



平成30年12月より地域医療連携室へ医療社会事業専門員として入職しました藤井恭介と申します。

医療ソーシャルワーカーの業務は初めてで、まだまだ慣れない事が多いですが、患者様のQOLを実現する為に全力で取り組みます。

出身は嬉野市です。のどかなこの地域が好きなので、嬉野医療センターで働く事で近隣地域の方々へ貢献していきたいと思いますので、至らない事もあるとは思いますがご指導の程よろしくお願いいたします。

リハビリテーションって何をしてるの 認定理学療法士のご紹介

理学療法士 金丸裕貴



今回は私が今年度取得した認定理学療法士についてご紹介させていただきます。

はじめに、認定理学療法士とは、日本理学療法士協会が定める資格制度で7分野23領域から成り、自らの専門性を高める活動において、高い専門的臨床技能の維持、社会・職能面における理学療法の専門性を有する理学療法士を、認定理学療法士として認定する制度です。資格取得までには、所定の研修プログラムを修了し、症例報告10例の審査、専門分野の筆記試験に合格する必要があります。

私は呼吸器分野の認定理学療法士を取得し、現在は主に呼吸器病棟や救急救命センターに勤務しています。急性期の呼吸リハビリテーションの対象の患者様は、人工呼吸器管理下の重症の方や、多発外傷を伴う呼吸器疾患の方など、ハイリスクの症例が多くみられます。呼吸リハビリテーションの役割としては、急性期の呼吸管

理を合併症なく完遂し、良好な経過で患者様を集中治療室から退室できることを目標に介入します。呼吸管理はもとより全身管理、感染管理、原病の管理と一体となって進めなければ目標を達成することはできません。

また、私は当院のRRS（Rapid Response System；院内迅速対応システム）委員会に所属しており、RRS委員長の救急医を中心に院内ラウンドを実施しています。RRSラウンドは主治医や担当看護師から要請を受け、容態の悪い方や急変のリスクがある方を対象に、急変を未然に防ぐことを目的として定期的に行われています。病棟スタッフの皆様は、MET基準に該当する方はもちろん、気になる患者様がいましたら各病棟のRRS委員へお気軽にご相談ください。

当科では他にも呼吸療法認定士3名、がんリハビリテーション研修修了者4名、心臓リハビリテーション指導士1名が在籍しており、各分野に対応した急性期リハビリテーションの体制が整っております。より専門性を深め、良質な医療を提供するためにも、当科スタッフは積極的に様々な専門資格の取得を目指しています。なお、循環器認定理学療法士や、腎臓リハビリテーション指導士の受験予定者もいますので、今後も引き続き特色あるリハビリテーションの専門領域についてご紹介していきたいと思っています。



聞くことを目的としない音 超音波検査と臨床検査技師

認定超音波検査士・臨床検査技師 伊東春佳



みなさんは超音波が「音」であることをご存知ですか？

人間が聞くことのできる音は20～20,000Hzと言われます。これに対して超音波は20,000Hzを超える、聞くことを目的としない音を指します。イルカやコウモリは超音波を自ら発し、はね返ってきた超音波を感知して仲間とコミュニケーションをとったり、餌を探したりしているそうです。これを医療用に応用したのが超音波検査で、体内の組織にぶつかってはね返ってきた音を画像にしています。超音波検査は基本的に痛みがなく、人体への悪影響もほぼないため、短期間に繰り返し検査をすることができ、検査を行う上で第一選択となることも

多い検査です。超音波検査で観察することができる範囲は多岐にわたり、肝臓や胆嚢、腎臓、脾臓、消化管、血管、甲状腺、乳腺、心臓など様々です。検診などでも使われており、一度は超音波検査を受けたことや目にしたことがある方も多いのではないのでしょうか。

臨床検査技師には様々な認定資格制度が設けられており、認定資格を取得することで認定臨床検査技師として専門性を高めることができます。どの認定資格も実務経験や豊富な知識を必要とし、取得までに時間がかかります。その中から私は平成30年4月に認定超音波検査士という資格を取得しました。認定超音波検査士の資格は領域ごとに分かれており、私は女性検査技師による検査が必要とされる、乳腺を含む体表臓器領域の認定資格を選びました。学生の頃から超音波検査に興味があり、卒業後、幸いにも当院で超音波検査を担当することとなりました。日々の業務の中で超音波検査結果が診断や治療に大きく影響するのを目の当たりにし緊張感を感じるとともに、医師が必要とする情報を提供できたときの達成感もあり、さらに専門的な勉強をしたいと思い認定試験を受験しました。試験までは勉強会に足を運んだり、上司や先輩に教えていただいたりしながら勉強し、試験当日は緊張しましたが何とか合格することができました。

当院検査科には20名程の検査技師が在籍し、そのうち6名が超音波検査を担当しています。また、認定超音波検査士は6名中4名で、残り2名も今年受験予定です。さらに検査の質を向上させ、患者さんや医師へ正しい情報を提供できるようスタッフ全員で努めていきたいと思います。また、私個人としては就職して6年目となりますが、まだまだ知識不足であることを痛感する毎日です。さらなるスキルアップのために他領域の認定資格の取得や、学会・勉強会への参加を積極的に行い、患者さんに安心して検査を受けていただける検査技師になれるよう努力していきたいと思います。



病院クリスマスコンサート

- 病院クリスマスコンサートでハンドベル演奏をお披露目してきました！
- 今年結成したハンドベル部は看護学校の1年生を中心に構成しています。
- 今回は「赤鼻のトナカイ」「星に願いを」「ふるさと」の3曲を演奏しましたが、
- 今後、さらに曲目を増やし、色々なイベントで披露していきたいと考えています！
- クリスマスコンサート当日は入院中の患者さんのお迎え・誘導もさせていただきました。
- ハンドベルの音色を聞いて、「いい音だね」「気持ち落ち着くね」と話して下さる方もおられました。
- そのような感想を聞いて、看護学生でも患者さんの癒しになれる、治療に協力できると感じ、病院職員のチームの一員として参加出来たような気がしました。
- これからも嬉野医療センター附属看護学校ハンドベル部を盛り上げていきたいと思いますので、曲目のリクエストなどありましたら、ぜひ学校までご連絡ください！



つり部紹介 ～つり部始めました～

みなさん釣り部をご存じでしょうか？おそらくご存じの方はいないのではないかと思います。なぜなら存在していなかったからです！！私自身趣味で釣りをしており、放射線科の釣りが好きな人たちと何度か釣りに行ったり、釣りの話をして楽しんでいました。その話を小耳に挟んだ放射線科の広報委員が、知らない間に広報委員会で放射線科の釣り部紹介の記事を広報誌に載せたらどうかとの提案をし、その提案が採用されたみたいで・・・

先日放射線科の広報委員がニヤニヤしながら「木須さん釣り部の紹介記事書いてください」と依頼されました「ん？釣り部？なにそれ？」ということで今この記事を書いています。

まず、釣り部？がないのでこれを機会に釣り部を作るところから始めようと思います。

現在放射線科には釣りが好きな人が15～16人程度いますので釣り同好会から始めたいと思います。釣りが好きで釣りに行かれていた方はいらっしゃるでしょうか？忙しくて一緒には行けなくても釣りの話をしませんか？THEフィッシングの感想を言い合いませんか？また、釣りをしたことがない方でも釣りに興味がある方はいらっしゃるでしょうか？釣りは嫌いだけど魚を食べるのが好きなど、どんな方でも大歓迎ですので随時募集します。いつの日かバスケット部やフットサル部のように部に昇格できるように・・・



ちなみに釣り同好会では最近はいか釣りや、シーバス釣りを主にしています。サビキ釣りなど、どんな釣りでもしますのでお誘いください。また、海釣りだけではなく、川や池等での釣りも行いますので声掛けをよろしくお願いします。



病棟紹介

第5病棟

5病棟副看護師長 阿部容子

5病棟は、呼吸器内科・総合診療内科の病床数54床の病棟です。肺がんや誤嚥性肺炎などの呼吸器疾患、不明熱や感染症など検査や処置、内科的治療を必要とする患者さんが多く入院されています。回復期から慢性期、終末期まで様々な経過をたどり、治療やリハビリ、緩和ケアを受ける患者さんの医療・看護に努めています。

スタッフは、優しく穏やかな呼吸器内科医師2名、いつも冷静な総合診療内科医師3名、明るくパワフルな看護師長をはじめとする看護師30名、看護補助者2名で構成されています。チームワークをモットーに、コミュニケーションを活発に行い、患者さんによりよい医療や看護が提供できるようお互いに声をかけ合っています。



病院理念でもある「ひとり一人を大切に」を基本として、病気や症状と向き合っている患者さんとそのご家族の意思を尊重した支援を行っています。「痛みをとりたい」「安楽に過ごしたい」「苦痛に感じることはしたくない」といった患者さんひとり一人の望む生活に近づくことを目指し、苦痛となる症状の観察や評価、医師など多職種チームとの連携を図り、QOL（生活の質）が保たれるようなケアを提供しています。また、「自宅に帰りたい」「外出したい」「自分の好きなことをしたい」という患者さんの思いを受け、入退院支援専従看護師や医療ソーシャルワーカー、リハビリ科や薬剤科とも連携を図り、早期から患者さんやご家族の希望を叶えるための介入が行えるよう、密に話し合いをしています。週1回の合同カンファレンスでは、多職種



との情報共有や今後の介入についての検討が行われ、退院前訪問や退院前カンファレンスの実施、退院後に自宅へ電話を行い、状況確認など入院中から退院までの継続した支援に繋がっています。スタッフひとり一人の思いは熱く、これからもその思いを原動力に、患者さんやご家族の意思を大切に、5病棟の団結・チーム力を発揮していきます。

部署紹介

医療安全管理室

医療安全係長 進藤留美



医療安全管理室では、全職員から提出されるヒヤリ・ハット報告の確認や集計・分析をしています。その分析結果を医療安全に関する委員会で情報共有し、安全な医療を提供するために必要な対策を検討しています。また、委員会メンバーで環境ラウンドを行い、実施状況の評価をしています。その他、各部署で開催される安全に関するカンファレンスに参加したり、マニュアルに沿った行動がとれているのかを確認するために調査することもあります。

『安心で安全な医療』を提供するためには、安全に関する知識や技術を学んでいく必要があります。当院ではほぼ毎月医療安全推進セミナーを開催しています。このセミナーは、看護部・薬剤部など各部署の方々に日々の仕事に活かせる内容で、旬な情報を交えて、企画してもらっています。写真は、1年目の看護師を対象にした輸液ポンプ・シリンジポンプの正しい取り扱いについての研修を行っているところです。

また、平成30年度から医療安全対策地域連携加算が新設され、年1回程度その他施設との相互チェックを行うことになりました。10月に長崎医療センターと相互チェックを行い、12月には町立太良病院の医療安全チェックをさせていただきました。安全な医療を提供していくために各病院工夫されていることがあり、見習うべきこともたくさんありました。毎年必要なチェックになりますので、改善のチャンスととらえて取り組んでいきたいと考えています。

そして、医療安全には医療者だけでなく、患者さんの協力も不可欠です。患者間違いを防ぐためにネームバンドの使用だけでなく、注射や処置・検査を行う前には患者さん自身に名乗っていただき、一緒に確認しています。

これからも患者さん方に安心して医療を受けて頂ける環境作りを、また、その安全な医療を提供する職員にとっても働きやすい環境作りを一緒に考えていきたいと思っています。



学校紹介

嬉野医療センター附属看護学校

看護学校 教員 鳥井太貴

本校は平成 31 年に開学 65 周年を迎えました。

その間、約 2300 名が学舎から巣立ち、全国津々浦々、そして世界で活躍しています。

< 教育理念 >

『 高い看護実践力と専門職としての自律 』

本校の教育は、豊かな人間性を養い、あらゆる健康段階にある人間を統合的に理解し、科学的思考に裏付けられた看護実践力を育成することにある。さらに専門職として、ものごとを主体的に考え、自分の規範（価値）に従って行動できる自律した看護師を育成する事にある。

< 教育目的 >

人間を尊重し、看護に必要な看護実践力を身につけ、社会に貢献できる自律した人材を育成する。

< 期待する卒業生像 >

- ・ 自己を理解し、他者を尊重し、人間関係を深める事ができる
- ・ あらゆる対象の健康水準に応じて必要な理論、技術、態度を用いて看護問題を抽出し、科学的、系統的に看護実践できる
- ・ 保健・医療・福祉チームの一員として倫理的・社会的責任と義務を認識した行動がとれる
- ・ 変化する社会（国内外）に対して、継続的に自己学習できる態度を身につける

以上を教育の柱として、日々学生と共に学修に取り組んでいます。

6 月からは新校舎・新学生寮に新築移転します。65 年の歴史をつなぎ、新たな歴史を積み上げていきたいとします。



沿革

昭和 21 年	旧看護婦規則により、国立嬉野病院附属看護婦養成所として開校
昭和 28 年	保健婦助産婦看護婦法の改正に伴い、国立嬉野病院附属高等看護学院に名称変更
昭和 50 年	厚生省組織規定の一部改正により、国立嬉野病院附属看護学校に名称変更
昭和 51 年	学校教育法第 8 2 条の 2 に規程する専修学校（専門課程）となり、看護専門課程看護学科となる
平成 7 年	文部省告示第 7 号により、専門士「医療専門課程」の称号認定
平成 16 年	独立行政法人化に伴い、独立行政法人国立病院機構嬉野医療センター附属看護学校に名称変更
平成 20 年	校舎新築移転
平成 25 年	開学 60 周年

本校の学校教育の目指すもの

本校のカリキュラムの特徴は、人間理解に重きをおいた教育です。患者様を身体面だけでなく、心から支援ができる看護師になれるよう教育していきます。また、実習のほとんどは、嬉野医療センターで行われます。嬉野医療センターは、「ひとり一人を大切に」を基本理念に、我が国の政策医療を担っています。実習指導においても、看護部と連携を取りながら充実した実習指導を行っています。

学校設備の紹介

情報科学室

情報科学・演習の講義をもとにデータ収集や統計を学びます。

また、根拠ある看護実践を提供するために必要な文献検索を行うことができます。

ゼミ室 個別学習やグループでの学習会に活用しています。

模擬病室 モデル人形を活用してフィジカルアセスメントの技を磨きます。

基礎看護実習室・在宅看護実習室

患者さんに必要な技術が提供できるまで技術の演習をします。



模擬病室。
モデル人形で呼吸音の聴診中



リアルな教材で臨床看護技術を
学ぶことができます



筋肉内注射の技術演習



iPad を用いて学習しています



嬉野医療センター 新病院定点写真

開院まで期間が迫る中、
建設風景を一挙公開しちゃいます。



2016年12月19日



2017年3月14日



2017年6月26日



2017年9月13日



2017年12月15日



2018年3月15日



2018年6月14日



2018年8月30日



2018年12月28日

これからの **病院のあゆみ** 新病院移転まで残りわずか 移転の経緯も含めて 振り返りを

part 4



ドローンより新病院外観（平成 31 年1月）

新病院のグランドオープン6月4日に決定

当院は現在、新幹線の「嬉野温泉駅」前に新病院を建設し移転予定ですが移転開院日が6月4日に決定いたしました。

新病院の外来の診療科としては総合診療科、神経内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、リウマチ科、糖尿病・内分泌内科、小児科、外科、整形外科、脳神経外科、心臓血管外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、放射線科、麻酔科、救急科に新たに歯科口腔外科が加わります。外来患者様で6月以降の予約の方は新病院での受診となりますので宜しくお願いします。

入院病床は一般374床・感染4床に緩和ケア病床21床の399床となります。緩和ケア病棟は新病院の8階に「家族控え室」「面談室」を備えた全室個室の病棟となります。また開院に伴い6月1日には入院患者様の移転となります。

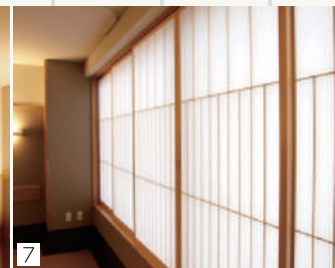
当日は入院患者様・ご家族様・地域の皆様にも大変ご迷惑をお掛けしますが安全を第一に行って参りますのでご理解ご協力をお願いいたします。



1 新病院屋上から現病院 2 正面側より新病院外観 3 新病院屋上から建設中の附属看護学校と学校宿舍
 4 新病院屋上から新幹線嬉野温泉駅建設予定地 5 外来駐車場側より新病院外観



6



7



8



10



11



9

- 6 病室内部
- 7 病室窓は障子貼
- 8 ここにベッドが入ります
- 9 病室(個室)



12



13

- 10 2階外来棟診察室
- 11 外来棟産婦人科診察室
- 12 リハビリテーション室
- 13 集中治療室(ICU)



14



15



16



17

- 14 2階会計窓口の施行も進行中
- 15 2階外来棟より1階を望む
- 16 2階入院受付
- 17 講堂(大会議室)



国道側より新病院外観





おせちのウラ事情

栄養管理室室長 林田由紀子

毎年のことですが、栄養管理室はゴールデンウィークや年末年始の長期休暇は、納品業者も休みになるため、生鮮以外の必要な食品が一気に納品されます。特に心配だったのが、冷凍庫。普段から7日分しか入らないのに、今年は曜日の関係（納品業者の都合?）もあり、年末に11日分納品されることになりました。患者数が減るとはいえ、いつでも対応できるよう、リッチ食やライト食用の冷凍食品や付加食のアイス等も常備しないといけません。なんとか整理して納まったものの、冷凍庫はパンパンでした。新病院では、プレハブ冷凍庫が設置されるので、現在の冷凍庫より容量が期待できますが、乾物倉庫が現在の半分の面積になってしまうので、悩みは尽きません。

さて、当院のおせち料理の紹介です。盛付の種類も多く普段より時間がかかりますが、入院中の患者さんに少しでもお正月気分を感じていただけるよう、スタッフ一同心を込めて作りました。また、毎年メッセージカードも添えますが、今回は看護学生さんたちにもお手伝いしてもらいました。これからも患者さんに喜んでいただけるよう、様々な行事食の提供をしていきたいと思います。

看護学生作メッセージカード



元旦
朝



元旦
昼



編集後記

新しい年になったかと思えばもう2月。月日が経つのは早いもので平成最後の日も新病院の開院の日も間近に迫ってきました。

まだまだ寒い日が続きますが、嬉野医療センターの職員のお尻には火がつき始めたようです。

次号出る頃には、新病院も完成して中身の伴った状態になっている（予定）なので、さらに詳しくお知らせしたいと思います。

2019年も嬉野医療センターをよろしくお願いします。

（広報委員会）